



中国・香港中文大学

A 類社会選修

萩原 隆太

留学開始時の学年：3 年生

留学期間：2014 年 9 月～2015 年 8 月

香港中文大学へ

香港中文大学は、東京学芸大学の協定校の中でも世界トップクラスの教育機関です。総合大学ということもあり、語学学習だけでなく、様々な学問分野が学べます。

私の留学のきっかけは、学部生の 2 年から一橋大学小平国際寮で RA(レジデントアシスタント)を務めたことです。留学生と寝食を共にする中で、彼らが留学を通して「日本語」だけでなく、「日本」をあらゆる方面から吸収しようとする姿に大きな刺激を受けました。またグローバル化の中で、将来教員として生徒をサポートする際に、留学の経験が役立つと考えたからです。

社会科での専攻が国際政治学ということもあり、反日運動などを始め日中関係が悪化するのを目の当たりにし、中国という国に興味が湧きました。その中でも、「香港」は一国二制度という特殊な統治形態であり、概念的理解だけではなく、実際の制度運営や市民の声といった草の根レベルにまで見聞を広げたいと感じたのです。

大学生活について

大学では様々な授業に参加しましたが、とりわけ印象的なのは、国際政治学の授業で、中国大陸出身の教授が天安門事件を批判的に語っていたことです。言論の自由が保障されている香港ならではの一面が垣間見れました。

香港の大学ではイギリス統治の名残から今日でもカレッジ(college)制が採用されています。カレッジとは大学に所属する 9 つの書院(寮組織)を表しており、各々が独立した理念のもと建物や寮を保有し、活動を行います。

私が所属した敬文書院では、週 3 回、communal dinner として学生と教職員が一堂に会し夕食を取る機会が設けられていました。ここではアカデミックな話からプライベートな話まで、ざっくばらんに話すことができました。また



各学期の前後には **High table dinner** として著名人を招待して行われる場もありました。

他には、**Rural School Service Project** と呼ばれる香港の小学校における英語教育プロジェクトに参加しました。パートナーであるデンマーク人学生と共に授業案を作成し、授業実践を行いました。香港の英語教育水準は高く、幼稚園時から積極的に学んでいる子も多いです。

また社会科専攻ということもあり、香港の初等及び中等教育における公民教育についても興味を持って調査しました。とりわけ中国という国家との関係で、香港がどのように教えられているのか、また子どもたち自身が香港をどのように捉えているのかを探りました。

香港留学で得たもの

私の留学直後に、大規模な反政府運動である「雨傘運動」がありました。日本でも大きく報道されたようですが、その運動の萌芽段階で、政治に関する香港人の生の息遣いを直に感じることができました。これは日本で書籍などを読んでいるだけでは、学べなかったと思います。



留学後、3回ほど香港を訪れましたが、昔の友人たちだけでなく、寮の掃除をしてくれたおばちゃんや食堂のおばちゃんとも必ず会っています。香港という社会の中で、たくさん人たちと出会えたことは私の一生の財産です。

現在、一橋大学の大学院で中国法を専攻しています。大学院では、香港で学んだことを基礎に研究を進めており、香港留学がなければ大学院に進学することはなかったと思います。その意味では、香港留学は、私の人生を変えたと言っても過言ではないでしょう。